

『元朝秘史』におけるカアタイ・ダルマラ

—ホエルンとチレドの実子であったという仮説に基づいて—

Qa'atai-Darmala of the Qa'ad-Merkid group in the *Secret History of the Mongols*: Based on a hypothesis that Qa'atai-Darmala was the Child of Mother Hö'elün and Chiledü of the Merkids

藤井 真湖

Mako Fujii

Abstract

At the explicit level of the the *Secret History of the Mongols* (hereafter the SHM), it is believed that Mother Hö'elün, Chinggis Khan's mother, was abducted by Chinggis Khan's father, Yisügei, just after her wedding. That is, she was abducted while going to the house of her husband, Chiledü of the Merkid group, for the first time.

But the last conversation that was exchanged at the deadly moment when the newlyweds were cornered by Yisügei and his brothers feels too intimate for us to consider them as newlyweds. Their actions and conversations look like a couple who has been together for some time. Indeed, when Yisügei and his brothers approached, Hö'elün took off her underwear and gave it to her husband, saying "Smell my scent! Take care of your life."

In this paper, I would like to present the hypothesis that Mother Hö'elün had already been married to Chiledü for a certain period of time and had a child named Qa'atai Darmala. For this purpose, this paper considers all expressions related to the Merkid group, such as "Merkid" and "Three Merkid," or the name Qa'atai-Darmala, the leader of Qa'at-Merkit, which is one of the "Three Merkids."

キーワード

Secret History of the Mongols, Merkid, Chinggis Khan, Hö'elün-eke, Qa'atai-Darmala

はじめに—問題の所在—

『元朝秘史』（以下、秘史）はチンギス・カンの事績を中心に叙述されているモンゴルの記念碑的古典である。チンギス・カンの史実としての前半世は謎に包まれているが、秘史においてはそうした前半世がドラマティックに描かれている。そこで描かれた内容には他の歴史文献では全く触れられていないベクテル殺しといった異母兄弟殺しやメルキト集団に新妻ボルテ夫人

が奪われるといったセンセーショナルな内容も綴られている。こうした出来事を実際に起こった史実としてみなすことに疑問を呈する研究者も多いが、秘史に記されている内容が史実であれ虚構であれ、そうした内容が記された背景には何らかの意図があったとみなすことができる。これまで筆者は秘史の「作者」の意図―多くは非明示的に示されている―を読み取るための考察をおこなってきた。本論で対象とするメルキドのカアタイ・ダルマラという人物は歴史文献の『集史』、『聖武親征録』、『元史』には現われていない人物である¹。彼の属するカアト・メルキド集団の名前もこれらの文献には見えない。とはいえ、筆者のこれまで考察してきた秘史に関する所論に基づくと、この人物が単なる装飾的な存在とは思えない。

秘史でメルキドの名前に初めて言及されるのは、チンギス・カンの父イエスゲイ・バアトゥル（以下、イエスゲイ）の時代における叙述の中でである。イエスゲイはメルキトのチレドという人物からホエルン夫人を掠奪して自分の正妻にする。そして、イエスゲイとこのホエルンから生まれたのがテムジン、すなわち後のチンギス・カン（以下、チンギス）である。イエスゲイによるこの略奪事件はメルキト集団に忘れられてはおらず、彼らはイエスゲイの息子時代であるにも関わらず、チンギスの正妻ボルテ夫人を逆に略奪するという事件を引き起こしたのだと秘史には叙述されている。

奇妙なことに、積年の報復ともいえる略奪事件においては、そもそもの当事者であったはずのチレドについては一切触れられていない。すなわち、なぜ次世代に到るまで復讐が遅延されていたのかは不明である²。このボルテ夫人の略奪事件を核とする一連の事件を“ボルテ事件”と呼んで筆者は考察したことがある（藤井 2014b）。考察の詳細は複雑なのでここでは割愛するが、結論だけを述べておけば、前述したメルキトによる襲撃の遅延という不可解さは、非明示的にはチンギスがイエスゲイ死後にジャムカに奪われたイエスゲイ遺民をジャムカから取り戻すための自作自演劇であったことと関係がある。

ケレイトの王罕は離散したチンギスの民を集めてやるという口約束をチンギスにしていたものの（巻2 §96）、具体的な行動を起こすことはなかった。それゆえ、チンギスはボルテ夫人をあえてメルキトに奪わせるという奇想天外な策を用いたのである³。ボルテを救出するための援軍をケレイトの王罕に要請すると、王罕はチンギスとジャムカの間で起こっていた遺民の取り合い事件に巻き込まれなくなかったために、王罕は必然的に配下のジャムカを動員するだろうとチンギスは見込んでいた。チンギスが予期したとおり王罕はジャムカをボルテ事件に動員した。この奇策を用いてチンギスは自分の受け継ぐべきであった遺民を自ら作り出した混乱の機に乗じてジャムカから奪い返そうとしたのである。

ところで、そもそもボルテ事件の発端となった事件すなわちホエルンが略奪された事件は、明示的にはメルキドのチレドがオルクヌウト集団からホエルンを娶る途上で、偶然、そこで鷹狩りをしていたイエスゲイがホエルンを見初めて兄弟を動員して奪ったとされる事件である（巻1 §54）。注目すべきことは、ホエルンとチレドの言動が秘史では次のように叙述されていることである（同巻 §55）。

「あの三人の人々に気がつきましたか貴方は。尋常な顔つきではありません。貴方の命にかかわる顔つきをしています。貴方の命さえあれば、車の前室ごとに乙女たちがいます。黒い枠の前室ごとに女人がいます。貴方の命さえあれば、乙女、女人を得ることができます、貴方は。別の名前をもっている者にホエルンと名を付けることができます、貴方は。自分の命を大切にしてください。(a)私の匂いを嗅いでいきなさい」と言って、自分の肌着を脱いだのを**(b)チレドが馬上から身を乗り出して受け取ると、早くもその三人も山鼻を回って迫ってきた。**

[ただし、下線部の (a) と (b) は筆者による。]

上記の (a) は妻ホエルンの言葉と行為であり、(b) はそれに対する夫チレドの行為であるが、両者とも新婚夫婦のそれにしては不自然なように思われる。なぜならこの場面のやりとりには、少なくとも一定の期間、時間を共にした男女の雰囲気が濃厚に漂っているからである。

モンゴルのハルハでおこなわれていた“伝統的な”婚姻慣習においては、女性は夫との結婚後すぐに実家から財産を分与されたわけではなく、当該結婚がある程度続くことが確認された後であった(藤井 1998 : 86-97)。言うまでもなくこれは現代においてはすでに見られない慣習である。結婚そのものと財産分与の時期が異なっていたのは、結婚が長く続くかどうかに対する不確実性と関係していたように思われる。“伝統的な”婚姻は当人同士の決定ではなく親同士の取り決めであったため、一定期間を経た後に、おそらくは子供が生まれた後に、女性の実家から最終的な財産分与がなされたのであろうと考えられる。つまり、女性側からの財産分与こそが、結婚の真の社会的承認を示すものとなっていた。

13世紀における婚姻儀礼についての詳細は不明であるが、20世紀初頭まで行われていたとされる“伝統的”婚姻儀礼における前述のような慣習を参照するならば、秘史におけるホエルンの略奪事件は新婚間もない夫婦に起こった事件ではなかったかもしれないという視点が浮上してくる。何よりもそのように考えるとホエルンとチレドの上に引用したやり取りが納得できるものとなる。つまり、秘史に叙述されている事件の時点で、チレドとホエルンは新婚ではなく、夫婦関係が定着した時期、すなわち一子を設けた時期だった可能性がある。

明示的なレベルにおいてもこれがホエルンのメルキトへの最初の輿入れでなかったことが暗示されている。なぜなら、ボルテ夫人の略奪の際にボルテ夫人の母親がその場にいた形跡が一切ないからである。秘史に基づくと、イエスゲイと同時代のクトゥラ・カアンの上の世代であるアムバガイ・カアンより後の時代においては婚姻の際に花嫁の母が娘を花婿側に送っていくという慣習が形成されたことが伺われる⁴。実際、イエスゲイの息子チンギスがボルテと結婚する際には、ボルテの母チョタンがチンギスのもとに娘を送ってきている(巻2§94)。つまり、イエスゲイに奪われたときにボルテ夫人の母親がいなかったことは、ボルテがチレドに連れられて行く状況が最初の輿入れではなかったことを暗示しているのである⁵。

むろん、この推測は秘史の叙述の欠落に基づいているので根拠としては弱いかもしれない。

とはいえ、イエスゲイがチレド夫婦に遭遇したのは、彼らがホエルンの実家から財産をもらってくる途上であったとみなすと、イエスゲイが兄弟たちを動員できた理由も推測しうるものとなる。なぜなら、イエスゲイはホエルンの財産を分け与えるという条件で兄弟をホエルン略奪に誘った可能性があるからだ。そもそも、人妻を略奪するだけであれば恨みを買うだけで何ら得るものはなかったはずである。イエスゲイとその兄弟による襲撃の目的はイエスゲイにとってはホエルンであったかもしれないが、イエスゲイの兄弟たちにとってはホエルンの実家から分与された財産だった可能性がある。この事情を考察する場合、チングスの直接的な祖先であるボドンチャルが彼に馬乳酒をふるまっていた集団を兄弟と共に襲撃したという内容が叙述されている巻1 § 35~ § 39 が参考になる。当該箇所では、ボドンチャルに協力した兄弟たちが襲撃で得た財を分けていたことに言及されているからである（巻1 § 39）⁶。

1. 1 本論の目的と議論の流れ

本論では、まず2. 1で、秘史に登場するメルキト集団の領袖三人のうち、カアト・メルキドのカアタイ・ダルマラという人物が、ホエルンとメルキド集団のチレドとの間に生まれた子供だったという仮説を提示する。続く2. 2においては、カアタイ・ダルマラの出現する箇所や、メルキドや三メルキドという表現、あるいはその三メルキドを構成する三つの集団名に言及されているすべての箇所―本論では“メルキド表現”と呼ぶことにする―を表に整理・登録する。そのうえで、2. 3においては三メルキドという表現が集中的に出現しているメルキトによるボルテ夫人略奪事件を中心とする巻2 § 102 から巻3 § 119 までの箇所を対象に考察をおこなう。そのさいには、仮説に基づくと、齟齬が見られないだけでなく、当該箇所の内容の細部もよく読めるようになることを示す。さらに、2. 4においては、2. 3で考察しなかった他のメルキト表現の考察をおこなう。最後の4. においては結論として考察をまとめる。

1. 3 本論の意義

秘史の「作者」はチングスに関する内容を肯定的に書かなければならないという言論の不自由さの中に置かれていたものと考えられる。それゆえ、チングスの父親イエスゲイの行動も非難されないように記されなければならなかったものと推測される。問題は、明示的に描かれている、チレドからホエルンを略奪したイエスゲイの行為が、あたかも当時のモンゴル社会で略奪婚の存在が受け入れられていたかのような誤った印象を与えるものとなっていることである。本論の意義は、下記の議論をとおして、こうした略奪婚は日常的な出来事ではなく“事件”として存在していたことを示すことができる点にあると考える。

現在、モンゴル国においては、結婚式に行くことは不吉だとみなされているが、こうした考え方は秘史と共通するものがある（逆に、葬式の行列に出会うことは吉であると考えられている）。秘史においては、婚姻が勇者にとって致命的な場面になりうることは別の箇所でも明示的

に語られている。それは、チンギスと王罕との関係が破局に至る出来事である。彼らの関係が決定的に決裂した原因は、チンギスと王罕の息子の間で合意されたはずの婚姻がチンギスを抹殺するための謀略の手段として利用されようとしたことにあった（巻5 § 168）。婚姻儀礼は勇者にとって最も無防備に臨まざるをえないシチュエーションである。それゆえ、この王罕の息子の裏切りー王罕自身もこれを不本意ながらも承認していた（巻5 § 167）ーはチンギスにとって許されざるべき行為であったといえる。

1. 4 研究の枠組み

考察に入る前に、本論における秘史の位置づけに言及しておきたい。

1. 4. 1 “英雄叙事詩”としての秘史

秘史を筆者は当該文化を特徴づけてきた“英雄叙事詩”と深く関連するものとして捉えている。筆者が現在のところ考える“英雄叙事詩”とは一般的なジャンルとして通用している（と思われる）ものとは若干異なる。すなわち、これは、「伝統的に」英雄叙事詩とは異なるジャンルとして扱われてきた伝説などのようなものを含む幅広い概念である。なぜそのような概念で英雄叙事詩を捉えているのかといえば、ひとつには、モンゴルの伝承者がしばしばジャンル規定には無関心だからである（彼らは専門家が別々のジャンルに分けるものと同じものとして認識している）。

もうひとつには、既成のジャンルを超えて共通する重要なある特徴のためである。筆者が取り扱ったことのあるフォークロアには英雄叙事詩以外にも伝説や民話、そして文学作品もあるが、それらには明示的に読み取れる意味とは正反対もしくは対照的な非明示的な意味をもつ構造が観察される。こうした構造の共通性のほうがジャンルの境界よりも重要であると思われる。明示的に読める意味と対立するような暗黙の意味を持つこうした構造は、社会における言論の自由の抑制の下での表現の可能性を開くための芸術的技術として注目される。

1. 4. 2 対象の範囲

四部叢刊本の続集二巻を含めた計十二巻を便宜上「ひとつの作品」とみなし、この総体を対象とする。秘史の編集過程においては多くの説があるが、現在のところ、敢えて連続体のものとして扱う。

1. 4. 3 対象文献

筆者の秘史研究においては、原文の音訳漢字をローマ字転写するさいには、四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・碓精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（2001年）に依拠している。訳語に関しては、小沢重男の『元朝秘史全訳』3巻と『元朝秘史全訳続攷』3巻（1984～1989年）及び岩波文庫の『元朝秘史』上下巻（1997年）を参照にした。

1. 4. 4 方法論

テキスト読解の方法論は、フランスの構造・記号学者ロラン・バルト Roland Barthes が「物語の構造分析序説」で示した構造分析枠組みにもとづいている(バルト 1979 [1977]:1-54)。この方法論は、歴史学における方法論とは異質なものである。歴史学においては言語を現実に生起した事象を反映している―反映の際のイデオロギー的歪みはある程度は認めてもいる―とみるが、筆者の採っている言語観は構造主義的立場に立つものであるため、言語は現実の反映でなく“言語=世界”という見方を採る。言語観のこうした差異は当然ながら秘史の読解に多くの差異を生み出すことになる。それゆえ、本論の研究においては、歴史家であれば当然扱う各種の史書を参照にしていない。本論のような文学研究における非明示的意味が現実に生起した史実なるものとの間にいかなる連関があるのかは今後の課題である。

2 カアタイ・ダルマラがホエルンの実子であったという仮説

2. 1. メルキト集団の発話に見られる「母ホエルン」という表現

1. 1で指摘した3点、すなわち1) ホエルンとチレドの会話の雰囲気、2) ホエルンの母の不在、そして3) イェスゲイ兄弟たちの協力、といった点は傍証にすぎない。それゆえ、ナラティヴ・レベルにおいて、ホエルンとチレドとの間に子供がいたことを強力に明示している箇所をまず取り上げることにはしたい。ただし、「明示している箇所」とはいえ、その明示のされ方は単純なものではないので、以下、その箇所を引用しておく。それは、チングスの妻ボルテ夫人を略奪しようと襲撃しにきたメルキトの集団についての叙述箇所である(巻2 §102)。

彼らは三メルキドであった。ウドウイド・メルキドのトクトア・ベキ、ウラス・メルキドのダイル・ウスン、カアト・メルキドのカアタイ・ダルマラこれら三メルキドは、「先に、母ホエルンをチレドより奪い取られた」と言って、今その仇を取りにきたのであった。

上記の引用における下線部“母ホエルン”という表現は注意を引く。まるで、ホエルンは三メルキトにとっての母であるかのような書き方だからだ⁷。すなわち、“母ホエルン”という表現は仮説を明示的に示している箇所といえる。問題は、引用箇所にもとづくと、この3人がいずれもホエルンの子供であった可能性を示していることになることである。しかし実際には、トクトアはチレドの実兄であり(巻3 §111)、ダイル・ウスンが後にチングスに自分の娘クランをチングスに献上していることを考慮に入れれば(巻7 §197)、トクトアとダイル・ウスンはホエルンと同世代である可能性が高い。それゆえ、ホエルンの実子の候補として残るのはカアタイ・ダルマラという人物ということになる。この3人の中で同世代かどうか不明であるため、この人物こそチレドとホエルンの子供である目星をつけることができる。つまり、“母ホエルン”と言ったのは、トクトアやダイル・ウスンではなくこの人物だという可能性が

高い。

カアタイ・ダルマラに着目すると、このカアタイ・ダルマラを他の二人とは異なる形で秘史では扱われていることが観察される。すなわち、三つのメルキド集団のうち、ウドゥイド・メルキドのトクトア・ベキとウラス・メルキドのダイル・ウスンと一緒に叙述されていることが多いのに対し、カアト・メルキドのカアタイ・ダルマラは単独に叙述されていることが多く観察される。とくに注意を引くのは、前者の二人についてはその死が明示的に叙述されているのに対して、後者のカアト・メルキドは明示的には叙述されていないことである。彼をチレドとホエルンの子供であるとみなすなら、カアタイ・ダルマラの死に言及されていないのは不思議ではない。カアト・メルキドのカアタイ・ダルマラについては最後の出現箇所でのように記されている（巻3 § 112）。

カアタイ・ダルマラを捕獲した。連れてきて板の枷をはめさせて、カルドゥン・ブルカンに向かわせた。

この叙述は § 112 の冒頭にあるもので、この叙述のすぐ後にはチンギスの異母兄弟であるベルグテイがメルキドに捕らわれた母を取り戻そうとメルキド集団の居住地にやってきたことが記されている。カアタイ・ダルマラの名前に触れられる箇所はこれが最後であり、明示的にはカアタイ・ダルマラはチンギスの手にかかることを予感させて叙述が途切れている。しかし、この叙述の時点においてチンギス一家はメルキドの襲撃からブルカン・カルドゥン山に逃れていた時期であることを考慮に入れる必要がある。つまり、カアタイ・ダルマラはチンギスだけでなく、チンギスの母であるホエルンのもとに連れていかれたことになる。つまり、カアタイ・ダルマラがホエルンとチレドの間に生まれた実子であったのなら、この箇所の意味は全く異なったものとなる。なぜなら、カアタイ・ダルマラはホエルンの嘆願によって助命された可能性が高いと考えられるからである。

2. 2 メルキト表現の出現箇所

秘史におけるメルキドに関連する語句を挙げれば表1のようになる。表1は四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（2001年）に依拠している。ただし、当該書においては出現形式別に記載されているので、表1ではそれらを出現順で再配列してある。なお、巻5 § 169 に出現する Merkit_çaqa'an は馬の名前として出現するので、この語は省いてあることを断っておく⁸。なお、表1には本論で対象とするカアタイ・ダルマラが出現する箇所を①~④で示しておいた。この人物の名前はメルキトという語と一緒に登場する場合もあるがそうでない場合もあるからである。

メルキドあるいはそれに関連する語句は75箇所あるが、それらの出現箇所の位置をみると、いくつかのグループに分けうる。たとえば2つの出現箇所の間に1節〜4節の開きがあるようなものは「同じ箇所」として捉えることができるが、15〜20節の開きがあるものは、そこに境界があるものとして理解することができる。そのような基準で見ると、メルキドの出現箇所はA〜Hの8つの区分に分けうる。表1はその8つの区分ごとに、出現順の番号とその具体例、出現箇所（四部叢刊本の該当箇所であらば例えば01:34:05は第1巻:第36丁:第5行を指す）、当該箇所の文脈のおおよそを備考欄に整理したものである。メルキドはMerkidとMerkitという2種類の表記が見られるが、訳語は“メルキド”と濁音で統一しておいた。以下の考察においては「三メルキド」という表現に着目するので、その表現には枠全体を灰色にして強調しておいた。これ以外にも、メルキド表現として数少ない事例には□で囲んで強調しておいた。メルキド表現ではないものの、備考欄では考察で重要となる“ホエルン母”という表現に下線を引いておいた。本論では区分Aと区分Bについては詳細に検討するので備考欄には最小限のことしか記載していないが、区分C以降については強調部分以外は概観するにすぎないので、当該出現箇所の文脈がある程度わかるように備考欄に〔 〕で補足しておいた。

表1: 秘史におけるメルキド表現

区分	番号	具体例	出現箇所	巻と節	備考
A	1	Merkid-ün	01:34:05	巻1 §54	Merkid-ünYeke.Čiledü Olqunu'ut_irgen-eče öki a[b]=ču メルキドのイエケ・チレドはオルクヌウトの民から娘を娶って…〔チレドとホエルンの結婚についての最初の叙述として〕
§55~§101の47節					
B	2	qurban Merkit	02:48:06	巻2 §102	tede qurban Merkit a=ju'u. 彼らは三メルキドであった。
	3	Uduyit_Merkid-ün	02:48:06		Uduyit_Merkid-ün Toqto'a ウドイト・メルキドのトクトア
	4	Uwas_Merkid-ün	02:48:07		Uwas_Merkid-ün Dayir_usun ウワス・メルキドのダイル・ウスン
	5	Qa'at_Merkid-ün	02:48:07		Qa'at_Merkid-ün (Qa'atai_Darmala) カアト・メルキドの(カアタイ・ダルマラ)
	①	Qa'atai_Darmala	5と同箇所		(Qa'at_Merkid-ün) Qa'atai_Darmala
	6	qurban Merkit	02:48:08		ede qurban Merkit erten-ü Hö'elün_eke-yi Čiledü-dača これら三メルキドは古の <u>ホエルン母</u> をチレドから…
	7	Merkit	02:48:10		Merkit ügüle[1]dü-rün ≪Hö'elün-nü hači abura-n メルキドは言い合うにはホエルンの仇を取ろうと…
	8	qurban Merkit	02:49:09	巻2	Temüjin ≪ tede qurban Merkit maqat geyit-tür-iyen ajira-bay ü…≫ テムジンは「三メルキドは家に戻つ

			§ 103	たのか?…」
9	Merkid-ün	02 : 50 : 01		Merkid-ün qoyina-ča uqa'uta quban qonoq daqa'ul-ju メルキドの後ろから探索させるべく三日三晩つけさせ…
10	Merkid-i	02 : 50 : 02		Merkid-i küngke'ül=jü Temüjin Burqan de'ere-če bawu-ju メルキドを遠ざけてテムジンはブルカン山から下りて…
11	qurban Merkit-te	03 : 01 : 04	卷 3 § 104	qurban Merkit-te genen bü-küi-für ire=jü 三メルキドに油断しているときやってきて…
12	bügüde Merkid-i	03 : 02 : 05		bügüde Merkid-i bürel-tele Börte-üjin-i čin-u abura-ju 全メルキドを殲滅するまでボルテ夫人を救い…
13	qamuq Merkid-i	03 : 02 : 06		qamuq Merkid-i qaltači-ju 全メルキドを破り…
14	qurban Merkit-te	03 : 04 : 01	§ 105	qurban Merkit-te ire-jü oro-ban hoqtorqu bolqa[q]da=a 三メルキドのところにきて自分の臥所をもぬけの殻にさせた。[チンギスがカサルとベルグテイにジャムカに伝えるように言った言葉の中で]
15	(Uduyit) _Uwas _Merkid-i	03 : 05 : 05		(Uduyit) _Uwas_Merkid-i ülütkе-jü üjin Börte-yen abura=ya. (ウドウイト)、ウワス・メルキドを誅滅しボルテを救おう。
16	qamuq Qa'at_Merkid-i	03 : 05 : 06		qamuq Qa'at_Merkid-i qaltači-ju (qatun Börte-yü'en qari'ul-u-n abura=ya.) 全カアト・メルキドを破り (妃ボルテを救い戻そう)
㊟	Qa'atai Darmala	03 : 06 : 02		Qa'atai_Darmala edö'e Qaraji_ke'er-e büi je.カア タイ・ダルマラは今頃、カラジ草原にいるぞ。
17	(Qa'at) _Merkit_irgen	03 : 08 : 02	§ 106	(Qa'at) _Merkit-tür qatqu[ll]du=n morila=ya bö=et ke'e=n ügüle=. カアト・メルキドに切りつけ 合うために出馬しようと言え。
18	Uduyit_Merkit	03 : 08 : 07		Uduyit_Merkit-tür üküldü=ye bö=et ke'e=n ügüle=. ウドイト・メルキドに死闘しようと言え。
§ 107~ § 108 の 2 節				
19	Toqto'a Uwas_Merkid-ün (Dyyir_usun qoyar)	03 : 14 : 04	§ 109	Toqto'a Uwas_Merkid-ün (Dyyir_usun qoyar qamtut=ču Selengge huru'u Barqujin oro-n) トクト ア、ウワス・メルキドのダイル・ウスン二人は共に なりセレンゲのほうに、バルクジンに入り
20	Merkid-ün ulus	03 : 15 : 01	§ 110	Merkid-ün ulus Selengge huru'u söni-de dürbe-jü メルキドの人々はセレンゲのほうに夜に逃げ…
21	Merkid-i	03 : 15 : 03		Merkid-i söni-de gü daruča-ju dawuli=n メルキドを夜に押さえて略奪し…
22	Merkid-ün ulus	03 : 16 : 04		Merkid-ün ulus dürbe-jü ayisu=kuy-yi söni-de メルキドの人々が逃げて近づいてくるのを夜に…
23	Merkit_irgen	03 : 16 : 06		Börte-üjin-i teyin jolqaldu-ju Merkit_irgen-eče (abura-qsan yosun eyimü.) ボルテ夫人をそのよう に出会ってメルキドの民から(救った道理はこのよう

				なものである。)
24	Uduyit_Merkid-ün Toqto'a_beki Uwas	03 : 17 : 04	§ 111	Uduyit_Merkid-ün Toqto'a_beki Uwas ウドゥイト・メルキドのトクトア・ベキ、ウワス [25 に続く]
25	(Uwas)_Merkid-ün Dayyir_usun Qa'atai_Darmala ede	03 : 17 : 05		(Uwas) _Merkid-ün Dayyir_usun Qa'atai_Darmala ede qurban (ウワス・)メルキドのダイル・ウスン、カアタイ・ダルマラこれら三 [26 に続く]
㊸	Qa'atai Darmala	25 と同箇所		25 と同箇所
26	qurban_Merkit	03 : 17 : 05-06		qurban_Merkit qurban ja'ut haran üdür-ün erte Toqto'a_beki (-yin de'ü Yeke_Çiledü-deçe Yisügei_ba'atur-a Hö'elün_eke-yi buli=ju) 三メルキド 300 人は夜明けにトクトア・ベキ (の弟イエケ・チレドからイエスゲイ・バアトゥルにホエルン母を略奪され)
27	qamuq Merkit-te	03 : 18 : 05		qamuq Merkit-te huntawu. すべてのメルキドに禍に。
28	qotola Merkit[t]-te	03 : 19 : 02		qotola Merkit[t]-te huntawu bol=ba.全メルキドに禍となった。
㊹	Qa'atai_Darmala-yi	03 : 20 : 03	§ 112	Qa'atai_Darmala-yi erüs=be.カアタイ・ダルマラを捕獲した。
29	Merkidei	03 : 21 : 03	§ 112	Belgütei_noyan Merkidei ele yasutu gü'ün-ni(《eke-yi min-u abçira-.》 ke'e-jü qodolit-qu bü=le'e.)ベルグテイ 長官はメルキドの骨を持つ人は(「私の母を連れてこい」と言って鎗矢を射るのだった。)
30	qurban ja'ut Merkid-i	03 : 21 : 05		Burqan-ni quçildu=qsat qurban ja'ut Merkid-i(uruq-un uruq-a gür-tele hünestü-er keyis-tele ülitge=be.)ブルカンを囲繞した 300 人のメルキドを (子孫の子孫まで灰燼に帰すまで滅した。)
31	Merkit_irgen-i	03 : 22 : 10	§ 113	Merkit_irgen-i ebür ba an-u hoqtorqui bolqa-bai.メルキドの民を懐にさえ何もないようにさせた。
32	Merkit_irgen-i	03 : 23 : 03		Merkit_irgen-i tedüi busanqa=ju メルキドの民をそのように離散させて
33	Uduyit_Merkit	03 : 23 : 08	§ 114	Uduyit_Merkit dürbe-rün buluqan maqalaitu maral-un (quduq qudusutu ilkin jarqaq usun-u buluqan jalqa-qsan de'eltü tabun nasutu Kücü neretü …kö'üken-i…ol=ju) ウドゥイト・メルキドが逃げてテンの帽子をかぶって牝鹿の (脛皮の靴を履き、鹿などのなめし皮やカワソンの皮を縫い合わせた服を着た 5 歳のグチュという名前の…子供を…見つけて)
34	Merkid-ün	03 : 24 : 07	§ 115	Temjün To'oril_qan Jamuqa qurban qamtut=çu Merkid-ün(çorqan ger çoqori'ul=ju)テムジン、トオリル・カン、ジャムカの 3 人は一緒にメルキドの (家を打ち壊し)
§ 116 の 1 節				
35	Merkid-ün Toqto'a-yi	03 : 27 : 09	§ 117	Merkid-ün Toqto'a-yi (arbila=ju ab=u=qsan altan

					büse Jamuqa_anda-da büsele'ül=bei.) テムジン はメルキドのトクトアを (捕虜にして取りあげた金帯 をジャムカ盟友につけさせた。)
	36	Uwas_Merkid-ün (Dayiyir_usun-i)	03 : 28 : 02		Jamuqa Uwas_Merkid-ün (Dayiyir_usun-i arbila-ju ab-u=qsan altan büse Temüjin_anda-da büsele'ül=bei.) ジャムカはウ瓦斯・メルキドの (ダイル・ウスンが していた金帯をテムジン盟友につけさせた。)
§ 118~ § 137 の 20 節					
C	37	Mer[kɪ]d-ün	04 : 24 : 02	巻 4 § 138	Hö'elün_eke Mer[kɪ]d-ün nuntuq_ača olda=qsan Gücü neretü kö'üken-i (…ede dörben-i ger dотора teji'e-rün) ホエルン母はメルキドの土地から得たグ チュという名前をもったのを… (…これら 4 人を家 の中で養うときに)
§ 139~ § 140 の 2 節					
	38	Merkid- ün(Toqto'a_beki)	04 : 30 : 08	§ 141	Merkid-ün (Toqto'a_beki-yin kö'ün Qutu)メルキドの (トクトア・ベキの息子クトゥ) [ジャムカを領袖 に結集した対チングスの諸集団の 1 つとして言及さ れている箇所]
	39	Merkid-ün Toqto'a_beki-yin kö'ün Qutu	04 : 34 : 06	§ 142	Merkid-ünToqto'a_beki-yin kö'ün Qutu メルキドのト クトア・ベキの息子クトゥ [チングスと王罕陣営に 対峙するジャムカ陣営にいる先遣隊の 1 人として言 及されている箇所]
§ 143~ § 143 の 2 節					
	40	Merkid-ün Toqto'a- yin kö'ün Qutu	04 : 36 : 06	§ 144	Merkid-ün Toqto'a-yin kö'ün Qutu (Selenge jori=n ködöl-jü'üi.) メルキドのトクトアの息子クトゥは (セ レンゲ河を目指して動いた) [ジャムカ陣営の勇者た ちの 1 人としての叙述]
	41	qurban Merkit	04 : 43 : 02	§ 145	erte üdür qurban Merkit 昔、三メルキドが… [負傷した チングスがジェルメに感謝する言葉の中で]
	42	Merkit	05 : 09 : 02	巻 5 § 150	Merkit qatquldu=ra ire-esü Činggis_qahan Jaqa_Gambu (ki'et qatquldu=ju iču'a-bai.) メルキドが切りつけ合 いに来るとチングス・カハンジャカ・ガムボ (等 は [メルキド] と戦い合って退却させた。)
§ 151 の 1 節					
	43	Merkit_irgen	05 : 13 : 05	§ 152	Merkit_irgen dawuli=ju ot=ču メルキドの民が略奪 して… [ケレイトの王罕の弟たちや領袖たちが王罕 が 7 歳のときにメルキドに略奪された話をしている 中で]
	44	Merkid-ün	05 : 13 : 06		Selenge-yin Bu'ura_ke'er-e Merkid-ün (a'ur nödü-be gü.) セレンゲのブウラ・ケエルでメルキド の (白をついた。)[43]の続きで王罕がメルキドに労 働を強いられていたという王罕の弟たちや領袖たち の発話の中で]
	45	Merkit_irge	05 : 13 : 08		Merkit_irge ha'ul=ju kö'ü-ben tende abura=ju (ire-esü) メ ルキドの民を破って自分の息子をそこに救って (や

					ってくる) [王罕の父クルチャクス・ビルクが王罕を救出したという話の中で]
§ 153~ § 156 の 4 節					
	46	Merki[t]_irgen-ür	05 : 27 : 03	§ 157	Ong_qan Merki[t]_irgen-ür morila-ju Toqto'a_beki-yi(Barqujin_töküm jük hülde-ju)王罕はメルキドの民に出馬しトクトア・ベキを (バルクジン盆地へ追い立て…) [チンギスが対タタル戦に出たのに対して王罕は対メルキト戦に出陣し、王罕がトクトアの長子トグス・ベキを殺害したという叙述の中で]
§ 158~ § 161 の 4 節					
	47	Merkid-ün Toqto'a-yin Qutu Čila'un qoyar kö'üt	05 : 32 : 09-10	§ 162	Merkid-ün Toqto'a-yin Qutu Čila'un qoyar kö'üt… (ečige-dür-iyen neyile-n Selenge huru'u gödöl-jü'üi.) メルキドのトクトアのクトゥとチラウンの二人の息子は… (彼らの父に合流すべくセレンゲ河を下って動いた) [ナイマンのククセウ・サブラクがケレイトを攻めた戦いについての叙述の中で]
§ 163~ § 177 の 15 節					
D	48	Merkid-ün Toqto'a_da	06 : 24 : 05-06	卷 6 § 177	Merkid-ün Toqto'a_da (Huja'ur_üjin ökin-iyen ni'urqa-n ök-čü)メルキドのトクトアに (フジャウル・ウジン娘を与え) [チンギスの語った昔話—王罕が自分の弟たちを殺したかどでオジが王罕に出陣したのを聞き王罕が逃げる途上でトクトアにおもねるために自分の娘を献上したという話—の中で]
	49	Merkit_irgen-ü Toqto'a_beki-ür	06 : 27 : 08-09		Merkit_irgen-ü Toqto'a_beki-ür morila-juメルキドの民のトクトア・ベキに出馬し [④と同様、チンギスの語った昔話—困窮してチンギスのもとに来た王罕をチンギスが養った後、トクトアに対し共に出陣したという話—の中で]
	50	Merkit_irge	06 : 28 : 01		Merkit_irge dawuli-juメルキドの民を略奪し [④と同箇所、チンギスが語った昔話—チンギスと王罕とでトクトアをバルクジン盆地に追い込んだという話—の中で]
	51	Merkid-ün Toqto'a_yin kö'ün	06 : 30 : 01		Merkid-ün Toqto'a_yin kö'ün Qudu Čila'un qoyar irgeメルキドのトクトアの息子クトゥとチラウン二人 [チンギスの語った昔話—対ナイマン戦においてチンギスを裏切った王罕は、そのときに王罕と一緒にいたトクトアの息子クトゥとチラウンに見捨てられたという話—の中で]
§ 178~ § 196 の 19 節					
E	52	Merkid-ün Toqto'a_beki-lü'e	07 : 45 : 02-03	卷 7 § 197	quluqana jil namur Qaradal_huja'ur-a Merkid-ün Toqto'a_beki-lü'e Činggis_qahan bayyildu-ju Toqto'a_yi (gölölge-jü)鼠の年の秋、カラダル河の源でメルキドのトクトア・ベキとチンギス・カハンが対戦しトクトアを (動か)し… [チンギスがトクトアを破ったという叙述の中で]

53	Merkit_irgen	07 : 45 : 07		Merkit_irgen dauliqda-run メルキドの民が略奪されると… [㊸のと同箇所ではメルキドの民が略奪されたという叙述の中で]
54	Qo`as_Merkid-ün Dayir_usun	07 : 45 : 07-08		Qo`as_Merkid-ün Dayir_usun öki-yen Qulan_qatun-i コアス・メルキドのダイル・ウスンが自分の娘クラン妃を… [㊸及び㊸と同箇所では、ダイル・ウスンがチンギスを懐柔するために自分の娘を献上しようとしたという叙述の中で]
55	Merkit_irgen	08 : 01 : 02	卷 8 § 198	Merkit_irgen dauli=ju Toqto`a_beki-yin (yeke kö`ün Qudu-yin qadu[n]t Tügei Döregene)メルキドの民を略奪しトクトア・ベキの(長子トクトウの妃たちトゥグエイ、ドルゲネ…) [メルキドを略奪してトクトウの妃2人のうちドレゲネをチンギスがオゴデイに与えたという叙述の中で]
56	Merkid-ün	08 : 01 : 05		Merkid-ün jarimut ulus (dayyiji=ju) メルキドのいくばくかの人たちが(離反して…) [メルキドが執拗に抵抗してタイカル砦に立てこもったという叙述の中で]
57	Merkid-i	08 : 01 : 10		Merkid-i e`ere`ül=ü-n ile=bei.メルキドを攻めさせた。 [㊸の出来事に対してチンギスがソルカン・シラの息子チンバイを差し向けたという叙述の中で]
58	Merkid-ün Toqto`a	08 : 02 : 06		(Naiman-u Gücüük_qan…) Merkid-ün Toqto`a qoyar neyile=ju (ナイマンのクチュルク・カンは…) メルキドのトクトアと二人で合流して… [ナイマンのクチュルク・カンとトクトアが合流して軍勢を立て直そうとしたという内容の叙述の中で]
59	Merkit	08 : 03 : 02		tende Naiman Merkit bol=u=n そこでナイマンとメルキドは力を合わせて… [トクトアが流れ矢に当たって戦死したことが叙述されている箇所では、その後、メルキドとナイマンと一緒に戦ったという内容の叙述の中で]
60	Merkit	08 : 03 : 06		Merkit Erdiř ketül=ü-n bara=ju (qaqača-n gödöl=ju`üi.) メルキドはエルディシ河を渡り終えて(分かれ動いた。)[エルディシ河で大半の者が溺死したが、僅かなメルキドとナイマンが渡河したという内容の叙述の中で]
61	Merkid-ün Toqto`a_yin kö`üt	08 : 03 : 10		Merkid-ün Toqto`a_yin kö`üt Qudu Qal Čila`un メルキドのトクトアの息子たちトクトウ、カル、チラウンらは… [ナイマンとは離れてトクトウたちがカンリンやキプチャウド集団のところを通過したという叙述の中で]
62	Merkit	08 : 04 : 01		Merkit Qanglin-i Kimča`ud-i da`ari=n メルキドはカンリンとキムチャウドを通過して [㊸と同箇所では、トクトウ、カル、チラウンを筆頭とするメルキドがカンリンとキムチャウドを通過したという叙述の中で]
63	Merkid-i	08 : 04 : 04		Merkid-i muqutqa=ju`ui.メルキドを根絶せしめた。 [チ

					ンバイがタイカル砦に立てこもったメルキトの残党を殲滅したという叙述の中で]
	64	Merkid-i	08 : 04 : 05		tende Merkid-i Činggis_qahan jarliq bol=u-run そこでメルキドを一チンギス・カハンは命令を出すには…[チンギスが殺すべきメルキドとそうでないメルキドを分離させたという内容の叙述の中で]
	65	Merkit	08 : 04 : 08		(urida oro=qsan) Merkit a`uru`ud-ača dayıjı-n bos=ču`u. (先に降った)メルキドは本営から背き立った。[㊟とは別に、本営にいた既に投降していたメルキドが背いたという内容の叙述の中で]
	66	Merkid-i	08 : 05 : 02		Merkid-i jük jük (hülüt=tele qubiya`ul=bai.)メルキドを方々に(絶えるまで)分配させた。[㊟の出来事を受けてチンギスがメルキドを一箇所ではなく完全に分散させたという内容の叙述の中で]
	67	qurban Merkid-ün Uduyt-ta	08 : 10 : 02-03	§ 199	(bi üc ü gen čaq-tur) qurban Merkid-ün Uduyt-ta Burqan_Qaldun-ni (qurbanta quči`ul=ju) (私は小さい頃)三メルキドのウドゥイトにブルカン山を(三周させられ…) [スペテイにクトゥ、チラウンらを追討させたチンギスがスペテイに語った昔話の中で]
	68	Merkid-i	08 : 12 : 01	§ 200	Naiman Merkid-i muqutqa=n bara=asu ナイマンとメルキドを根絶せしめると… [ジャムカがチンギス陣営に連行される内容となっている当該節の冒頭での地の文章における叙述の中で]
§ 201~ § 204 の 4 節					
	69	qurban Merkit	08 : 36 : 10	§ 205	qurban Merkit bidan-ıtur ire-jü 三メルキドが我々の所に来て… [チンギスがボオルチュに褒賞を与える際に語った昔話の中で]
§ 206~ § 207 の 2 節					
	70	Merkit	08 : 44 : 09-10	§ 208	Naiman Merkit čirai-ban ququra=ju ナイマンとメルキドは士気を失って… (…busangqaqda=bai je.) (…壊滅させられた) [チンギスが対ケレイト戦で功を立てたジュルチェデイに語った発話の中で]
	71	Merkit	08 : 45 : 01		Merkit Naiman-i busang=qui so`or-tur Kereyid-ün (Jaqa_Gambu jürin ökid-ü`en šiltag-iyar)メルキドとナイマンの掃討戦にてケレイトの(ジャカ・ガムブは二人の娘のおかげで…) [ケレイトのジャカ・ガムブは二人の娘を献上したので無傷にすんだとチンギスがジュルチェデイに語った発話の中で]
§ 209~ § 218 の 10 節					
F	72	Merkid-ün	09 : 24 : 03	卷9 § 219	Merkid-ün qajar Selengge-yi nuntuqla=ju (darqala-su)メルキドの土地セレンゲに住まいし(自在になしたい) [ソルカン・シラがチラウン、チンバイという自分の息子たちとともにチンギスに申し出た褒賞についての発話の中で]
	73	Merkid-ün	09 : 24 : 05		Merkid-ün (qajar Selengge-yi nuntuqla=ju nuntuq ba

					darqala=tqun gü.) メルキドの(土地セレンゲを住まいとするように。) [㉔におけるソルカン・シラとその息子の要望を受け入れたチンギスの発話の中で]
§ 220~ § 235 の 16 節					
G	74	Merkid-ün Toqto'a-yin	10 : 11 : 05	巻 10 § 236	Merkid-ün Toqto'a-yin (Qutu Čila'un teri'üten kö'üd-i in-u neke-n)メルキドのトクトアの(クトゥ、チラウンを頭とする息子たちを追って…) [スベテイがトクトアのクトゥ、チラウンといった息子たちを追跡しチュイ河で殲滅したという叙述の中で]
§ 237~ § 253 の 17 節					
H	75	<u>Merkidei</u>	11 : 22 : 07	続集 1 § 254	Merkidei čul ulja'ur-a ker mede'ül-kün bida.メルキド出自の者にどうやって統治させるのか我々は。[チンギスの後継者を決める際にジョチの出自をメルキドだと非難したチャアダイの発話の中で]

以下においては、表 1 の左欄に示された A~H の区分に基づきながら考察をおこないたい。次節の 2. 3 においては、区分 A と区分 B を扱う。まず、区分 A においてはチンギスの父イエスゲイがメルキドのチレドからホエルン夫人を奪った事件が叙述されている。すなわちチンギスとメルキド集団との反目の淵源が記された箇所である。ここにおいてはメルキド集団関連の話は単に“メルキド”という名前で登場しており、メルキトの下位集団については一切記されていない。ホエルン夫人の新婿は“メルキドのチレド”と表現されている(表 1 の①)。

表 1 全体を眺めると、“三メルキド”と記される箇所は区分 B に偏っており、その他の箇所では少数の例外を除き単に“メルキド”と記されていることがわかる。例外としては、区分 C の④①や区分 E の⑥⑦と⑥⑧の“三メルキド”がある。とはいえ、3 つとも区分 B に出現していた表現に再度触れたものにすぎない。それゆえ、本論の仮説に基づくと、区分 B を考察することが最も重要な考察となることが見込まれる。続く 2. 3 においてはその区分 B を考察する。

2. 3 仮説に基づくと見えてくる勇者間の駆け引き

まず、区分 B の初出である巻 2 § 102 では、ボルテ夫人事件においてブルカン・カルドゥン山にテムジンが首尾よく逃げたという内容の叙述に続いて、テムジンの追っ手であったメルキドについての説明が次のようになされている(ただし表 1 との対応がしやすいように引用文中に表 1 の番号を入れておく。以下の考察においても同様とする)。

巻 2 § 102 : 彼らは三メルキド(表 1 ②)であった。ウドウイド・メルキドのトクトア(表 1 ③)、ウウス・メルキドのダイル・ウスン(表 1 ④)、カアト・メルキドのカアタイ・ダルマラ(表 1 ⑤) これら三メルキド(表 1 ⑥)は、「さきに、母ホエルンをチレドより奪い取られたり」と言っ、今のその仇を取りに来たの

だった。彼らメルキド(表1⑦)が言い合うのに、「ホエルンの恨みを報じて、今、彼らの女どもを取った。己が恨みを報じたぞ、我らは」と言い合って、ブルカン・カルドゥン山から下りて、己が住み処に帰った。

前述のように、この箇所はカアタイ・ダルマラがホエルンの息子であったという本論の仮説を提起した動機の一つになっている。以下においても区分Bを巻と節ごとに示しながら、考察を進めることにしたい。

巻2 § 103 : ここにおいて、テムジンは「彼ら三メルキド(表1⑧)は確かに己が住処に帰ったのか、(それともどこかに)隠れているのか」と言って、ベルグテイ、ボオルチュ、ジェルメの三人をメルキド(表1⑨)の後から探索させて三泊させ、メルキド(表1⑩)を遠ざけて、テムジンはブルカン・カルドゥン山から下りている。

巻3 § 104 : この節においては、テムジンがカサルとベルグテイと共に王罕のもとにボルテ救援を要請する場面において、次のように語っている。

「三メルキド(表1⑪)に油断している時に、己が妻子を掠め取られた。カンなるわが父は妻子を救ってください、としてやって来ました、我らは。」

上記のように、§ 103を踏襲して、テムジンは“三メルキド”と表現して(表1⑪)、メルキドが一枚岩ではないことを示唆している。これに対して、王罕は、メルキドのことを一度は、“全メルキド”と言い(表1⑫)、また、一度は“普きメルキド”と言っている(表1⑬)。これは、テムジンが“三メルキド”とメルキドの中にも区別があるように表現していることと対照をなしている。王罕はこの事件にできるだけ関わりたくなかったと考えられるので(藤井2014a : 56-57)、敢えてメルキドを一枚岩にみなすことによって、「この件に自分が関わる限りテムジンの母ホエルンの息子―すなわちテムジンの異父兄弟カアタイ・ダルマラーを殺害することになるのだぞ!」と暗に警告したということになる。

巻3 § 105 : この節ではテムジンはカサルやベルグテイと一緒に自分の住処に帰り、王罕の言葉をジャムカ・アンダに伝令を遣わす。そのときにも、テムジンは“三メルキド”が来て妻を奪ったと伝えさせている。これに対して、ジャムカは次のように言う。特にメルキドについての箇所を引用しておく。

「己が仇を討ち、ウドウイド、ウウス・メルキド（表 1⑮）を誅滅し、夫人ボルテを救おう。己が恨みを報じ、普くカアト・メルキド（表 1⑯）を破り、后ボルテを救い戻そう。」

ここで注目すべきことは、ジャムカがメルキドを単にメルキドと言うのをやめて、“三メルキド”というテムジン⁹の表現を受け入れているかのようにメルキドの下位集団に言及していることである。しかも、この3つのメルキドを2つのグループに分けて、ウドウイドとウウスを一組にし、カアト・メルキドを別個にしている。ここで注意すべきことは、当該節でジャムカは続けて、下位集団の3つのメルキドのそれぞれのリーダーの居場所に言及しており、カアタイ・ダルマラの居場所が次のように発言されていることである。

「カムカウルスンの吹き飛ぶとき、カラ・トゥンに争い逃げるカアタイ・ダルマラは今、カラジ・ケエルにいるぞ。」

明示的に読めば、敵であるカアタイ・ダルマラがカラ・トゥンに逃げようとしているのは奇妙なことである。なぜなら、カラ・トゥンはチンギスが救援を要請したケレイトの王罕にゆかりのある地名であるからだ（巻 2 § 97, 巻 3 § 104）。つまり、カアタイ・ダルマラは敵地に逃げようとしているということである。カアタイ・ダルマラがホエルンの息子であったのなら、チンギス側の総大将であったケレイトの王罕にチンギスとの仲介を頼もうとしていたとしても不思議はない。ジャムカが最終的にメルキドの総大将であるトクトア・ベキを攻めようと発言しているのも、このことと関係があるのかもしれない。

仮説に基づいた場合に秘史で少し混乱が見られるように思われるのは、ジャムカが次の節 § 106 で、チンギスと王罕に伝えるように言った伝令においてカアト・メルキド（表 1⑰）に出陣しようと言った後に、ウドイト・メルキド（表 1⑱）に出陣しようと言っていることである⁹。このように、ジャムカはカアト・メルキドというチンギスの同母兄を攻めようと言ってはそれを覆すようなウドイト・メルキドのトクトアを攻めようと言いなおしていることが観察される。ジャムカの発言に一貫性を認める場合には、ジャムカの言葉がチンギスと王罕の両方への伝令として存在していることを考慮に入れなければならないように思われる。

つまり、ジャムカがカアト・メルキドの名前を持ち出したのは、ジャムカのチンギスに対する警告と考えられる。その警告とは「対メルキド戦をするならチンギスの同母異父兄弟カアタイ・ダルマラが領袖であるカアト・メルキドも襲撃するぞ」という警告である。これに対して、ジャムカがウドイト・メルキドの名前を持ち出したのは、王罕に対して報復の好機到来を知らせるという意味があった可能性がある。王罕については後続の節で、実はその昔メルキトの捕虜になっていたという叙述が見えるので（巻 5 § 152）、王罕がボルテ救援に応えることは昔

日の復讐をする好機だったともいえるのだ¹⁰。実際、ボルテ事件の際ではないが、王罕はトクトア・ベキの長子トグス・ベキを殺害しており、王罕がメルキドに一矢報いたことが記されている(巻5 § 157)¹¹。以上の考察に基づくと、ジャムカの言動には齟齬はないということになる。

続く2節にはメルキド表現が出現していないがその内容の概略を示しておく。まず、巻3 § 107では、テムジンと王罕陣営とが合流したことが叙述されている。続く巻3 § 108では、テムジンと王罕の陣営がさらにジャムカ陣営と合流したことが叙述されている。

巻3 § 109: テムジンと王罕とジャムカの三陣営がトクトア・ベキをブウラ・ケエルで襲撃した内容が叙述されている。トクトア・ベキには3度言及されており(3度目はトクトアとのみ記されている)、3度目に言及される際には、次のように叙述されていて興味深い。

トクトア、ウウス・メルキドのダイル・ウスの二人は(表1⑱)一緒になり、セレンゲ河を下ってバルグジンの地に入り、数人で身一つで逃げのびた。

ここでは、§ 105や§ 106におけるのと同様に、ウドウイト・メルキドのトクトアとウウス・メルキドのダイル・ウスが一緒になって逃げたとあり、カアト・メルキドとは異なる動きをしていることが観察される。仮説に依拠すれば、前者二人の動きはトクトアとダイル・ウスがチンギスと兄弟関係にあるカアト・メルキドのカアタイ・ダルマラを信用できなくなったことと関係しているとみなしうる。

巻3 § 110: 当該節においてはメルキドの民人が逃げていくときにテムジンがその中にボルテ夫人がいるのと遭遇したという内容が記されている。当該節においては、メルキドの下位集団には言及されず単に“メルキド”とのみ4度言及されていることが観察される(表1⑳, ㉑, ㉒, ㉓)。当該箇所はカアタイ・ダルマラがホエルンの息子であったという仮説を補強する箇所となっている。なぜならチンギスは当該節においてボルテ夫人と再会した後に、カアタイ・ダルマラがまだ倒されずにいたにも関わらず、王罕やジャムカに次のように言っているからである。

自分の求めているものは得た、私は、夜を徹する必要はない。ここに宿営しよう、我々は。

チンギスの上記の言葉はトクトア・ベキやダイル・ウスが一緒になって逃げた後のことである。それゆえ、チンギスは、王罕やジャムカがカアタイ・ダルマラに危害を加えることがないように、ボルテ夫人奪回で事を終えようとしたものと推測される。

巻3 § 111 : 当該節は、ボルテ夫人事件が終息したことを受けて、出来事の経緯をまとめた部分である。ここでは三メルキドのうち、トクトアとダイル・ウスンの集団名には言及されているが、カアタイ・ダルマラーの集団名が消えていることが観察される(表1 ㉔, ㉕, ㉖)。このことは、仮説に従うと、カアタイ・ダルマラーがチンギス陣営に吸収されたことを暗示しているといえる。注目すべきことは、その後で次のような叙述が見えることである。

先の日、トクトア・ベキの弟チレドより、イエスゲイ・バートルにホエルン母を奪い取られた、と言って、それを恨み、仇を報じに行った。そしてテムジンにブルカン・カルドゥンを三度めぐらせた時、ボルテが夫人をそこに先取して、チレドの弟チルゲル・ボコに関わらせたのだった。

前述したように、下線部の“ホエルン母”は当該論文における仮説のきっかけとなった箇所である。ここで指摘したいのは、当該節で初めてウドゥイド・メルキドのトクトア・ベキがホエルン夫人の前夫であるチレドの兄であったことが明かされていることである。すなわち、トクトアはホエルンにとって義理の兄に当たることになる。このように遅れてトクトアとホエルンの関係が示されている背景には、カアタイ・ダルマラーとホエルンの関係がこの箇所でも唯一明示されていることと関係しているのであろう。そして、チンギスの妻ボルテはチレドの弟チルゲルの妻になったと記されている。チルゲルはチンギスたちが攻めてきたことに怖れをなし、自分のせいで全メルキト(表1 ㉗)、普きメルキト(表1 ㉘)に禍をもたらしたと嘆いている。チルゲルはメルキドを一枚岩な集団として、三メルキドを認めてはいなかったことになる。

巻3 § 112 : 当該節の冒頭には次のような注目すべき内容が見える。

カアタイ・ダルマラーを捕獲した。連れてきて板の枷をはめさせて、カルドゥン・ブルカンに向かわせた。

この一文は非常に重要である。なぜなら、仮説に沿えば、カアタイ・ダルマラーは板の枷を嵌めさせられたとはいえ殺害されなかったことが推測されるからである。とくに、彼がテムジンにいるブルカン山に向かわされたことと叙述されていることはその推測を強めている。テムジンのもとにはホエルン夫人もいたので、ホエルンが我が子カアタイ・ダルマラーをテムジンに殺害させることはなかったであろう。この場合、チンギス自身も昔タイチウド集団に捕獲されたときに枷をつけられていたが殺されることはなかったことを想起してもよい(巻2 § 81)。

興味深いのは、上記の文章の続きに、“ベルグテイの母”がメルキドに奪われた母を取り戻そ

うとしてできなかったという内容が述べられていることである(表1⑳)。なぜなら“ベルグテイの母”についての顛末はカアタイ・ダルマラとは対照的だからである。すなわち、ベルグテイはテムジン陣営でメルキドに勝利したにも関わらず自分の母を失うのである。一方のカアタイ・ダルマラはメルキド陣営でテムジン陣営に敗北したにも関わらず自分の母すなわちホエルンと再会を果たしたと考えられるのである¹²。

さらに興味深いのは、表1の㉑のカアタイ・ダルマラが捕獲されてブルカン山に向かわせられた後、次のような叙述が見られることである。

ブルカン山を圍繞した300人のメルキド(表1㉒)を子孫の子孫まで灰燼に帰すまで滅した。

“300人のメルキド”というこの表現は初出であるが、ここにはカアタイ・ダルマラは含まれていないことが重要であるように思われる。つまり、この“300人のメルキド”とはカアタイ・ダルマラ率いるカアト・メルキド集団と考えられるが、カアタイ・ダルマラがチンギス陣営に吸収されてしまったため、カアタイ・ダルマラを領袖とするカアト・メルキドという集団は消失してしまった。それゆえ、こうした表現が生まれた可能性がある。

卷3§113: カアト・ダルマラが捕獲されたので、メルキド集団の下位集団の意味は消える。そもそもウドウイド・メルキドとウラス・メルキドは行動を共にしていたので、三メルキドとは実質的には二メルキドであったといえるからである。それを傍証するかのように、§113のカアタイ・ダルマラが捕獲された以降は、集団名として“メルキド”とだけ表現されており(表1㉓、㉔及びそれ以降)、三メルキドという表現は昔話における言及以外には出現していない。

卷3§114: ウドウイド・メルキド(表1㉕)のところから“我々の兵士たち”がグチュという幼子を拾ってきてホエルンに献上したという内容が記されている。ここで重要なのは、ウドウイド・メルキドという下位集団名が現われていることである。メルキドと呼ばれようと三メルキドと呼ばれようと、トクトア・ベキがこの集団の総大将であることは明らかなので¹³、秘史の「作者」がウドウイド・メルキドの領地からグチュと呼ばれる子供を拾ったことは重要な意味をもつ¹⁴。なぜなら、この子供の衣装はおそらく高貴な血筋を暗示しているからである(表1㉖の備考欄を参照)。すなわち、メルキド出自でトクトアの血筋の者である可能性も否めない—ただし確証はない—。このグチュについては次節の2.4でも考察することになるので、ここでは据え置く。

卷3 § 115 : この箇所においてもすでに“三メルキド”という表現ではなく、チンギス・ジャムカ・王罕の三者による連合軍は“メルキド”(表134)を襲撃したという叙述が見られる。

続く § 116 にはメルキト表現は現れないがその内容の概要は次のようになる。卷3 § 116 では、テムジンとジャムカが幼少のころに結んだ盟友儀礼についての叙述がなされている箇所であり、非明示的にはジャムカとチンギスが幼少のころから敵対関係にあったことが示されている(藤井 2014a : 52-59)。

卷3 § 117 : 当該節で仮説を踏まえるとよく理解できるのが、メルキトを征伐してからテムジンとジャムカが盟友の儀礼を結びなおすときに互いに贈り合う品物についての叙述である。それらは、トクトア・ベキやダイル・ウスンから奪った帯や馬であって(表135, 36)、カアタイ・ダルマラから奪い取った品物が一つもないことである。具体的に言うと、テムジンからジャムカには、トクトアから奪った金糸の帯と黄白馬が、ジャムカからテムジンには、ウラス・メルキドのダイル・ウスンから奪った金糸の帯と純白の馬がそれぞれ贈られている。どちらもカアタイ・ダルマラの持ち物でなかったことは、カアタイ・ダルマラが最終的にテムジンの異父兄であったという仮説に符合している。

以上が、区分Aと区分Bの考察である。

2. 4 区分C～Hまでの考察

次に、表1の区分C～Hまでの概要を整理したい。

区分Cはメルキト全体の領袖であるトクトアだけでなく、息子たちも登場してチンギス陣営との戦いを繰り広げている。11例のうち4例(33③④⑤⑥)にトクトアの息子であるクトゥに言及されているのが目につく。これはトクトアの時代から息子の時代に移行していることを暗示していて興味深い。このクトゥはトクトアの長子ではないようで、表1の④の備考欄に示したように、王罕がトクトアの長子トグス・ベキを殺害したとある—これについては2. 3で前述した—。ただし、区分Eの考察を先取りすると、クトゥは表1⑤の備考欄で示したように、“長子クトゥ *yeke kö'ün Qudu*”と呼ばれていることが観察される(卷8 § 198)。つまり、トクトアには長子が2人いたという矛盾が起こっていることになる。とはいえ、“長子クトゥ”という表現は秘史において1回のみ現れているのであるが、この⑤が現われる § 198 における内容の時点においては既にトグス・ベキが死んでいるので、クトゥを“長子”と言っても間違いではないだろう¹⁵。

むしろここで重要なことは、トクトアの長子トグス・ベキを殺したのが王罕であるにも関わ

らず、この出来事が非常に軽く扱われているように思われる点である。区分Eの考察を先取りしてしまうが、この軽さは㉔と関連しているものと推測される。そこにおいては、チンギスがクトゥの妃であるドレゲネをオゴデイに与えている。そして、この㉔において、初めて且つただ一度だけ、クトゥが前述のように“長子クトゥ”と表記されているのである。秘史では語られていないものの、このドレゲネはオゴデイの次の皇帝グユクの生母である。グユクのことを考慮に入ると、クトゥをトクトアの次子ではなく長子として表記した背景には、ドレゲネの身分を高めるためだった可能性がある。

区分Cについてはまた別の観点から論じうる点で重要である。それは、2.3で置いておいたグチュの問題である。とくに、区分Cの最初の事例㉗がグチュに関するものになっている点は見逃せないように思われる。グチュがホエルンをメルキド陣営からグチュをホエルンに捧げたのは「作者」を含む“我々の兵士たち”であったことを思い出すならば(巻3 §114)、この㉗は秘史の「作者」の存在の痕跡が認められる箇所となっており、重要である。

拙稿で論じたように、秘史の「作者」はホエルンに好意を持っていたと考えられる(藤井 2018: 19)。それは「作者」の一方的な思いであったと考えられるが、重要なのは、そう考えるなら、「作者」が関わってホエルンに献上した拾い子3人は、作者がホエルンとの間にもうけた“疑似的子供”になることである(藤井 2018: 19, 2019b: 117)。秘史の「作者」が拾ってきてホエルンに贈り物として捧げる子供たちを順番に挙げると、グチュ(巻3 §114)、ココチュ(巻3 §119)、シギ・クトゥク(巻4 §135)の3人となる。グチュは一番最初に拾われているので、比喩的に「メルキト出自の作者とホエルンとの間の長子」ということになる。㉗の備考欄で示したように“ホエルン母”という表現が拾い子について用いられている事実は、グチュが「作者」とホエルンとの間の“疑似的子供”と想像されていたことを裏付けているといえる。

次の区分Dはすべて巻6 §177に現れている4例で、チンギスが不誠実な行為を立て続けにおこなった王罕を非難する内容の中で現れている。当該節には㉘にもあるように、ダイル・ウスの出自がコワス・メルキドとなっており、他の区分とは表記の仕方が異なっていることが観察される。この区分D (§177)の内容は他の区分とは質を異にしており、§177の内容の独立性が際立っているといえる。

区分Eには巻7 §197～巻8 §208までの20例のメルキト表現が含まれており、全区分の中では最も多い事例数となっている。ここにおいては、メルキドがナイマンと組んでチンギス陣営と戦うものの、メルキドが敗戦を重ねていき最終的に滅亡に追い込まれていったという内容が展開されている。ここで特に注意すべきなのは、「作者」の存在の痕跡が認められる㉙と㉚である。後者の㉚に関しては前述したので割愛する。前者の㉙の内容はダイル・ウスが娘クランをチンギスに捧げようとしたというものであるが、このクランをチンギスのもとに届たのは「作者」であったため(藤井 2013: 56)、「作者」の痕跡が濃厚な箇所といえる。

区分Fには、メルキドの土地をソルカン・シラが息子たちと一緒にチンギスに褒賞として求

めたことに関する2例(㉒㉓)である。ここでは、メルキドの地域を別の集団に与えることにより、メルキドの滅亡をより徹底させようとしたものと読み取れる。

区分Gは1例しかないが(㉔)、重要な内容になっている。なぜなら、メルキドのクトゥが抹殺されたことが叙述されているからである。これはトクトアの血筋が絶えたことを示す点で重要である。

最後の区分Hも区分Gと同様に1例しかないが(㉕)、これも重要な内容になっている。なぜならチンギスの後継者選びの際に、チンギスの長子ジョチがメルキド出自なのでチンギスの後継者になる資格はないと次子のチャアダイが主張している箇所だからである。実は内容的にこの事例㉕は区分Gの事例㉔と対になっている。なぜなら、前者はメルキド全体の領袖であるトクトアの息子クトゥやチラウンが抹殺されてトクトアの血脈が絶えたことが明示的に示されているのに対し、後者ではこれを覆しかねない疑惑がチンギスの長子ジョチにチャアダイからかけられているからである。チャアダイはジョチがメルキト出自であるからチンギスの後継者となる資格がないという趣旨の発言をしているのである。すなわち、この㉔と㉕の間には表1で示したように17節の開きがあるので明示的レベルではわかりにくいものの、㉕では出自に着目すると、メルキドの血脈がチンギスの実子に流れているのだとチンギスが自分の子供に疑われるという皮肉なことになっているのである。

重要なのはこの観点から先ほどの区分Cの最初の事例㉗を見るときに浮上する新たな非明示的の意味である。前述のように、メルキトから拾われたグチュは「作者」とホエルンとの“疑似的子供”であった。重要なことは、不名誉にメルキト出自と疑われたチンギスの長子ジョチと比べると、このメルキドから拾ってきた子供はチンギスにとっては毛嫌いされるメルキト出自ながらも「作者」の疑似的長子となって肯定的な存在となっていることである。

以上が、区分C～Hまでの残りすべてのメルキド表現の考察となる。

3. 結論

以上、カアタイ・ダルマラをホエルンとチレドの間の実子であったという仮説に基づいて秘史の関係箇所を読み解いてきた。結論として、メルキド表現の出現するすべての範囲にわたって整合的な理解可能性を示しえたので、当該仮説は妥当なものであるということが主張できよう。考察を通して判明したことで最も重要な点としては以下の3点が挙げられる。

1) 明示的にはカアタイ・ダルマラはチンギス陣営に殺されたかのように読み取れるが、非明示的にはこの人物はチンギス陣営に捕縛された後、助命された可能性が高い。

2) 明示的にはメルキド集団の総大将であるトクトアの血筋の徹底的な抹殺が叙述されているが、グチュという幼子がメルキドの領地から「作者」を含む兵士たちに拾われ、非明示的にはこのグチュが「作者」とホエルンとの間の“疑似的子供”且つ「長子」となり生き延びたとい

う内容が埋め込まれている。

3) 明示的にはチンギスと彼の敵対集団であるメルキドとの戦いが叙述されているものの、非明示的にはチンギスの後継者の出自に関わる問題が叙述の隠された焦点になっている。すなわち、メルキドの血脈は表向き絶えたものの、メルキドの血脈は、チンギスの長子ジョチに否定的に受け継がれ—ジョチがチンギスの実子かどうかということの真偽はここでは問わないもの—¹⁶、「作者」とホエルンとの間の“疑似的子供”である「長子」グチュに肯定的に受け継がれた。

以上を踏まえ、最後に、ホエルンとチレドの間に子供がいたことがなぜ秘史で隠されたのかについて改めて考えてみたい。前述したように、チンギスを決して否定的に描かないという文書の性格上、チンギスの父イエスゲイの行為も肯定的に描かれる必要があったからだと考えられる。ただし、秘史では明示的にもイエスゲイはチレドの妻を略奪していることを考慮に入れると、イエスゲイは完全に肯定的に描かれているとはいえない。とはいえこの場合、イエスゲイの行為よりも、メルキト集団のチレドがホエルンを捨てて逃げ去ったことのほうに重きが置かれているように思われる。すなわち、チレドは弱かったためにイエスゲイに自分の妻を奪われたのだ、ということである。それゆえ、イエスゲイは略奪婚とはいえ、まだ正式に妻になってはいなかった女性を娶ったということにしておきたかったのであろう。なぜなら子供もすでに相手との間にもうけていた女性を奪ったとなると、イエスゲイのイメージを毀損せざるをえないからである。

ホエルンとチレドの間に子供がいたことが隠されているもう1つの理由には、「作者」の嫉妬という問題もあった可能性を指摘しておきたい。これを考える場合、ホエルンはイエスゲイが亡くなった後にムンリク・エチゲと再婚したことも明示的には述べられていないことと合わせて考える必要がある。これについては拙論で論じたので、詳細はそちらに譲ることにしたい(藤井 2018)。

参考文献

日本語

- 小澤重男 (1984) 『元朝秘史全訳 (上)』 風間書房
 小澤重男 (1985) 『元朝秘史全訳 (中)』 風間書房
 小澤重男 (1986) 『元朝秘史全訳 (下)』 風間書房
 小澤重男 (1989) 『元朝秘史全訳続攷 (下)』 風間書房
 小澤重男 (1997) 『元朝秘史』 上・下巻, 岩波文庫
 栗林均・确精扎布編 (2001) 『元朝秘史』 モンゴル語全単語・語尾索引』 東北アジア研究センター叢書第4号 東北大学
 藤井麻湖 (1998) 「草原の婚姻儀礼」『草原の遊牧文明』 (小長谷有紀・楊海英編著), 千里文化

財団, 58-62 頁。

藤井真湖 (2009) 「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相—『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに—」『愛知淑徳大学現社会研究科研究報告』第4号, 41-56 頁。

藤井真湖 (2010) 『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに—』『言語文化学会論集』第34号, 167-179 頁。

藤井真湖 (2011a) 『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察—“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—』『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』6号 21-41 頁。

藤井真湖 (2011b) 『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図—巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察—』『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7号, 45-66 頁。

藤井真湖 (2013) 『元朝秘史』の“モンゴル英雄叙事詩”的研究：現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語研究へ』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第15号, 43-70 頁。

藤井真湖 (2014a) 『元朝秘史』における anda 概念—王罕—ジャムカ—チンギスの非明示的な三者関係を基に—』『愛知淑徳大学—現代社会研究科研究報告』第10号, 47-71 頁。

藤井真湖 (2014b) 『元朝秘史』におけるボルテ夫人事件—繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして—』『愛知淑徳大学大学院論文集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科』第6号, 39-54 頁。

藤井真湖 (2018) 『元朝秘史』におけるホエルン夫人の隠された再婚～繰り返された再婚とその破綻の仮説～』『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第8号, 1-22 頁。

藤井真湖 (2019 a) Alan_Qo'a's Episode in the *Secret History of the Mongols* Reconsidered: Focusing on group-formation created as a result of discord among Alan_Qo'a's sons, The 2nd Annual International Conference on Traditional Cultures along the Silk Roads, Conference Proceeding, August 26-28, 2019, Beijing, China, pp.31-45.

藤井真湖 (2019 b) 「『元朝秘史』におけるシギ・クトウク—ジャムカ亡き後の作者の共感対象として」『改訂版 ユーラシア草原を生きる モンゴル英雄叙事詩』（ボルジギン・フスレ〔編著〕）三元社, 109-137 頁。

バルト, ロラン (1979 [原文 1977]) 花輪光訳, 「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』みすず書房

村上正二 (1970) 『モンゴル秘史 チンギス・カン物語 1』東洋文庫

村上正二 (1972) 『モンゴル秘史 チンギス・カン物語 2』東洋文庫

中国語

『史集』第一卷, 第一分冊 (1997 [初版 1983]), 余大钧・周建奇 译, [波斯] 拉施特 主编,

商务印书館，北京

注

- 1 村上正二は巻3 § 102の注において「ここではカアト・メルキト氏の長として描かれている人物で、この戦争で捉えられて殺されたとあるが、ラシードその他には全然見えていない人物。なお、前述したように、カアトという氏が、実在したか否かについても疑問であり、したがってこうした人物の存在も同時に疑わしい。脚色のためにあえて登場させられた人物であったろうか」と記している（村上 1970 : 203-204）。
- 2 ボルテはチレドの弟のチルゲル・ボコに救出されるまで与えられていたと書かれているので、秘史の明示的なレベルにおいてはチレドはすでに存命していなかったため、変則的なレヴィレート婚がおこなわれたたかのように読める。
- 3 ただし、この奇策がチンギス自身の発案によるものかどうかはまた別の問題である。
- 4 秘史においてはアムバガイが金朝で処刑された時の遺言が叙述されており、そこにおいては結婚の際には父親が娘を送る慣習を自分の事例を教訓に停止するように言っている（巻1 § 53）。
- 5 秘史においては男性の登場人物だけでなく女性の登場人物にもきめ細やかな叙述をしていることをみれば、後述するようにこうした叙述の欠落は直接の証明にはならなくとも意味ある欠落といえる。
- 6 ボドンチャルの兄弟を動員してある集団を襲撃した事件についての詳細な考察は（藤井 2019a : 31-45）を参照されたい。
- 7 小沢はこの「母ホエルン」についての注釈で次のように記している（小沢 1997（上） : 92）。「この時点で、ホエルンはテムジン、カサルなど5人の子等の「母」であったところに依る。「ホエルン夫人」は夫イエスゲイの夫人としてのホエルンであり、「ホエルン母」「母ホエルン」はテムジン達の母としてのホエルンである。」
- 8 ただし、英雄叙事詩においては馬が時として非正妻の隠喩となることがあるので、今後この語を入れて考察する必要もあるかもしれない。
- 9 ちなみに当該箇所においては、ジャムカの言葉にはウラス・メルキドのダイル・ウスンが脱落しているものの、前節の§105で見たように、ジャムカはウドウイドとウラスを一組にし、カアト・メルキドを別個にしているので、二度目のウドウイド・メルキドへの言及にはウラス・メルキドも含まれていると考えてよい。
- 10 ただし、『集史』の記述から王罕とメルキト集団の間には婚姻関係もあったことがわかる（集史 1997 [1983] : 187-188）。この箇所だけでなく秘史と『集史』には多くの齟齬が観察される。
- 11 ここで述べているように、秘史巻5 § 157においてはトクトアの長子（*yeke kö'ün*）のTögüs bekiが王罕に殺されたという内容が見える。村上はこのベキという称号に着目し、父トクトアのベキ、すなわち巫者的機能をもつ王者の地位を継承した人物であると解釈している（村上 1972 : 78）。ちなみに『集史』には、トクトアには6人の子がいて、その一人トグスが王罕に殺害されたとあり（集史 1997 [1983] : 188）、内容が一致しているので、秘史のこのトグスと同一人物であるとみてよいのかもしれない。
- 12 ベルグテイの母については（藤井 2009 : 41-56, 2010 : 167-179, 2011 a : 21-41）を参照。
- 13 『集史』にはメルキドはウドウイドとも呼ばれているという記載が見える（集史 1997 [1983] : 186）。『集史』の同頁にはメルキドの4つの下位集団に触れられているが、秘史と共通しているのはウラス・メルキドだけである。
- 14 秘史の「作者」論については（藤井 2011b : 45-66, 2013 : 55-68, 2019b : 109-137）を参照。
- 15 村上も同様のことを述べている（村上 1972 : 310-311）。
- 16 ただし、ボルテ夫人事件がチンギスによって画策されたのであれば（藤井 2014 b : 53）、ジョチがメルキドのチルゲル・ボコの実子であるとは考えにくい。